

「そうじゃないんだ、もう一度基本に戻って考え直そうよ」

課長の江尻が、忍耐の限界にきたという調子で声を荒げた。初夏の強くなりはじめた陽射しが降り注ぐ、午後の会議室である。集まっているのは五人の男性と二人の女性だが、みな紺を基調にした地味なユニフォームを着ているなかで、江尻ひとり白いワイシャツ姿が妙に目立つ。

「うまいとかまずいとか、わたしは好きですとか嫌いとか、そんなことを議論していても収拾がつかない。皆、食堂委員会のメンバーとして、原点に立ち返って意見を述べて欲しいんだ。そもそもこの社員食堂の改革プランは、総合福祉ビジョンのひとつとして計画してきたことだろうが、なあ、山倉さん」
 やっぱりこちらへ矛先が向いてきたかと、山倉英男はひそかに首をすくめた。この後江尻のいうことは分かっている。働きやすい職場作りのため、社員の健康増進と憩いの場としての食堂をどう考えるか、だ。それは山倉も十分承知している。

「ええ、ま、そうですね」かれは例によって曖昧な返事をした。

赴任して来た当時、江尻はその曖昧さが気に障るのか、むきになって山倉を問い詰めたりしたものだが、いまではあきらめたのか放任することにしたのか、それ以上かれにたたまかけることはしなくなっていた。

だが、今日の山倉が先ほどから心ここにあらざうという態度を取っているのは、別の隠れた理由があった。会議が始まった時刻から、かれはずっと便意を感じていたのだが、いまその便意は堪え難いほどにまで高まっていた。下腹部の熱い固まりは、すでに山倉の意志でコントロールできる限界にまで達しているのだ。

何とかして便所に行かなければ……かれはそればかりを考えていた。

ちょっとした議事の流れの隙間ができたら、その時をみはからって会議室を抜け出そう。ずっとそのつもりでいるのだが、江尻はそんな隙を作るところか、今日はいつになく会議に力が入っている。いまも彼のとなえる総合福祉ビジョンの一環としての社員食堂の意義について、滔々と自説を展開し始めたところである。こんなところで会議を抜け出そうものなら、後でどんな小言をいわれるか知れたものでなかった。

早く終わってくれないか……山倉が一心に念じていると、どうしたことが突然に天の助けがやってきた。

「…….」とここで、ここでもう一度昨年会社から提示した、総合福祉ビジョンについて確認しながら、この件を再検討してみようじゃないか。

山倉さん、例の資料、人数分コピーして持ってきてくれないか」

かれは一瞬幸運に耳を疑ったが、江尻の指示を確かめると、返事もそこそこに会議室を飛び出していった。

小走りに階段を下り、一つ下のフロアに降りると、自分の机のある総務課のほうには向かわず、階段のすぐ横の男子便所に飛び込んだ。一番奥のいつもかれが愛用している個室は、幸運にも空いていた。こんな時のほっとした気持ちには、ほかにたえようもない。扉に鍵をかけ便座に腰をおろすと、頭の天辺から足の爪先まで、いいようなない安堵感で満たされてくるのを感じた。

人間とは哀れなものだ、腰を下ろしたまま山倉は考えた。こんなことに束の間の幸福を感じてしまうのだから。しかし人間が野生の動物であれば、この幸福感を味わう事はないだろう。なぜなら排泄したいときには、したいところで好きなようにしてしまえばいいのだから。排泄は便所でするものだと決めたのは、人間社会のルールである。それは衛生面からだけでなく、羞恥心を保護するとか、社会の美観を保つとかの様々な目的から出た合理的な結論である。してみるとこの幸福感と快感は、単に生理的な欲求を満たしたというだけではなく、自らの意志でもってルールを守ることができたという、安心感からくるものだろう。

それにしても悪いのは江尻だ。会議の直前になって、あんな資料のミスを見付けるのだから。それも昼休みに山倉が食堂から帰つてくると、江尻はとつくに食事を済ませて席に戻っていて、午後一番の会議の資料にもう一度目を走らせているではないか。あの瞬間なにか悪い予感がしたものだ。あのままトイレに逃げてしまえば良かったのだ。ところが山倉がなんとなくぐずぐずしていると、江尻は自分で電卓を叩きながら、「おや」と眼鏡のフレームを擦り上げた。

「山倉さん、この表の縦横の合計違っているんじゃないか」

これで山倉の昼休みは終わってしまった。あとはもう一度計算をし直してワープロを修正し、資料のその頁を差し替える作業で一時ぎりぎりまでかかってしまった。お陰で彼の習慣通り昼のうちにゆっくりトイレにいつて、一時からの会議に余裕をもって望むという予定は、もちろんも崩れてしまった。それで会議の始めから、便意を催して仕方がなかったのだ。

山倉はここ十年ばかり、休みの日を除いてはほとんど自宅で大便をしたことがなかった。いつも昼休みかその直後に、会社ですませる習慣であった。

もちろん彼にしても、始めからこうだったわけではない。こうなったのは一人娘が小学校の高学年になる頃からだ。それまではかれも毎朝規則正しく「大」の方をしていたのだが、彼の出勤時間と娘の登校時間とはほぼ一致していた。それで大抵は早く起きている山倉のほうに先にトイレを使っていたが、やがて思わぬ反抗に会うことになった。

「お父さんの後は、くさくていやだ」というのである。

大体マンションの小さな換気扇では、短時間にトイレの換気を行うことは無理である。芳香剤をつかえば、匂いが混ざりあってかえってひどいことになる。そんなことぐらい我慢しなさいと、せめて父親の権威を示してやりたかったのだが、妻も娘の肩を持ち始めたために、結局は山倉が追い出されることになってしまった。

それから毎日、便意を我慢しながら家を出るはめになった。それでも最初は会社に着いてすぐにトイレに入ることになっていたのだが、電車の中で我慢を重ねているうちに、そのうち朝にはまったく催して来なくなり、かわりに昼食の後で排便したくなるように、体のリズムが変わってしまった。

そんな時、温水洗浄式のトイレを設置するという話が、課長の江尻から急に聞かされた。もちろん総務課係長である山倉の仕事として、である。とりあえず社内には二台だけ導入することにしたそのひとつを、総務課の近くに置く事を忘れなかったのはいうまでもない。

使ってみるとこれが実に気持ちがいい。使用後の爽快感は紙で拭くことを考えれば、比べものにならない。俺の尻は清潔なんだぞ、肛門がなめられるくらいきれいなんだぞと、あたり構わずふれて回りたいほどの心地好さだ。おまけに肛門に当たる温水の圧力には、ひそかな喜びすら覚えるようになってしまった。これではますます自宅のトイレなど使う気にはならず、昼食後のトイレは山倉の日常生活に、欠くべからざるものとなった。

だからかれにとつて午後一番の会議というのは、大変危険な設定である。そんな日には必ず昼休み中に用を足すように気をつけていた。それができないときには、今日のような目に会ったのだから。

それはそうといつまでも「至福の時間」を味わっているわけにはいかなかった。江尻を始め会議のメンバーを待たせて、トイレを使っているのである。課長はそろそろ資料が届かないことに、いらいらしだしているに違いない。山倉は濡れた尻を温風で乾かすのもほどほどにして、そこを出なくてはならなかった。

自分の席から資料のファイルを取りだし、必要部数のコピーを取って会議室に戻ると、江尻はまだ何か熱弁を振るっている最中だったが、山倉の姿を認めるとピタリと発言を止めて眼鏡のレンズ越しにかれをにらみつけた。

「相変わらず、えらく時間がかかるじゃないか」

それに対して山倉は、ファイルの整理が出来てなかったものでとか、例によって曖昧ないいわけをし、江尻もそれ以上追求せずにその場はすんでしまった。

食堂委員会はそれから三十分ほどで散会した。山倉がホワイトボードを消したり、後片付けを始めると、組合の代表で出席している池谷が、江尻の脇にすつと寄って小声でささやくのが耳に入った。

「食堂のメニューの議論なんか、のんびりやって大丈夫なんですか」

「何の話だ」

「先月も売り上げはダウンしてるでしょ。会社の業績はだいぶ悪いって、社員の間で噂が立ち始めてますよ。放つといいんですかねえ」

「それはそれ、これはこれだ。食事の内容を落としたりしたら、それこそ悪い噂が立つじゃないか」

ほんの一瞬の会話で、誰も気のつくものはなかったようだ。だが、山倉には妙に気になる会話だった。

「そりゃあ、課長さんのいつていることは立派だと思うよ。でもたかが社員食堂でそこまでやる必要があるんですかねえ」

「あの人の考えはそうなんだ。社員食堂には社員の健康を管理する使命があるってね。単に腹だけふくれりゃ、いいってもんじゃないわけだ」

その日の夕方、食堂の厨房脇にある事務室の中で、山倉は食堂のチーフの並木と雑談していた。半分は今日の食堂委員会の内容を伝えるという名目もあった。

事務室といっても三畳ほどしかない狭い部屋の中は、隅に小さなスチール机と電話を置き、パイプ椅子を二つ置けばほぼ一杯である。薄汚れた壁には、カレンダーやら食品成分表やら、社内内線電話表やらがべたべた貼ってある。しかもカレンダーは、ご丁寧に、食堂の母体である丸一食品と、業務の委託元、つまりここ東洋電子工業のものの二つが並べて貼ってあるので、ほとんど目の下からの壁面はふさがってしまっていた。

「ただどね、高血圧用の低塩食だとか、糖尿病用の食事までは、まあ俺も分

かったよ。そりゃ、お偉方の健康管理に気をつかうのが、総務課長の気配りだったのもうなずけるよ。今度はなんだ。女子社員に貧血が多いから、定食のほかに鉄分の多いメニユーを作れって。うちは病院じゃないんだ。食事が気になるなら、そういう奴は病院にいきやいいんだ。そんなに東洋電子の社員は、家では貧しいものしか食ってないんで、社員食堂ですべての栄養をとらなきゃいけないのかね。うちだって当たり前に栄養士がいて、ちゃんとバランスを考えてメニユーを作ってるんだ。俺もいままでいろんな所に勤めたけど、こんな注文の多い会社は初めてだよ」

並木は憤懣やるかたないといった調子で、煙草の吸い差しをステンレスの灰皿に押し付けた。

東洋電子工業の東京本社では、二十年以上前から丸一食品に社員食堂の運営を委託していた。それはほぼ山倉が総務の仕事を担当し始めた時期とだぶっている。この業界の常なのか、始めのうちはしょっちゅうチーフが交替していたが、この十年間はずっと並木に落ち着いており、山倉とは息のあったコンビになっていた。

しかし最近ほとんど山倉が並木の愚痴を聞いてやるか、あるいはなだめにまわることが多くなっていた。理論家の江尻は社員食堂の運営にも、彼の持論である「総合福祉ビジョン」をもちこんできた。考え方としては正しいものではあるが、山倉や並木にとっては、それはただ窮屈で面倒なものにしか受け取れないでいた。

特に「昼飯なんざあ理屈はいらない。蕎麦一杯つるつるとすすりこんじまえばいい」職人氣質の並木には、江尻の意見は面倒どころか、面妖なものにすぎなかった。今日の食堂委員会の結論も、「社員の健康管理に役立つ食堂メニユー」ということで、従来の成人病予防特別食の路線がさらに拡大したのになっていた。で、並木は頭にきたのである。

「こんなに細かいメニユーをやってる会社はないよ。定食がA・Bの二つあって、蕎麦とうどんとラーメンとカレーがあって、サラダやなんかのオプションが五品もあって、おまけに健康食と称するものがこれで三つになるわけだ。この程度の規模の会社で、こんな細かいメニユーをつくっちゃ利益が上がりなくなつて、俺は責任者としておこられちゃうよ」

結局は並木の心配はそこにある。山倉はそんな並木に、おだやかにふくめるようにいった。

「まあ、本気になつてそれ専用の献立を考えると大変だけどさ、定食をべー

スにして多少手を加える。たとえば良く分からないけど、鉄分をふやすならほうれん草とかレバーを加えるとかさ、最低限手を入れて格好つければいいんだよ。それで課長の顔も、あんたの顔も立つわけだ。それ以上の無理してもらおうってんじゃないよ」

並木はまだ口を尖らせて、四十男にしてはすいぶん子供っぽい仕種ですんでいたが、やがて不承不承にいった。

「分かったよ。栄養士と相談してなんとかするよ。いつもこうやって説得されるんだ。まったく係長にはかなわねえな」

次のハイライトを取り出して火をつけた。

「それにしても係長が裏でこんな苦労してるの、課長は知っているのかねえ」

それをいわれると、山倉はいつも適当に笑ってごまかすのだった。彼自身にもそれは触れてほしいことなのか、欲しくないことなのか良く分かっていなかった。課長がいくら命令しても、俺がいなければ仕事は回っていかないんだよ、そんなおこがましいことをいうつもりはなかった。心の底のどこかに「俺がいなければ……」との自負があるのだろうか。それは自分にも良く分からなかった。

「江尻課長は有名大学を出たエリートで、秀才かもしれないけど、もうちょっと下の者の悩みや、人の痛みを理解してもらわないと、俺は好かないね。係長も十才も年下の課長を良く立ててやってるよねえ。俺なんか絶対に我慢できないからね」

十才じゃないよ、十二才だよ、山倉はそういおうと思ったが、またいつもの曖昧な返事をしてしまった。江尻は昔から総務部の秘蔵っ子といわれてきた。山倉は江尻が新入社員として、総務部に配属されてきたときのことを良く覚えていた。確かに新人の癖にやたら弁が立つ男がきたなと思ったものだ。それから江尻は、地方勤務を含めて幾つかの部署を回りながら次第に頭角を現わし、ついに二年前から総務課長として辣腕を振るうことになった。その間、山倉はずっと総務課係長のままであった。

「そこへいくと、前の課長の梅川さんなんか、情が分かるいい人だったね。いつだったか年末に俺が一人で厨房の大掃除をやっているとさ、一升瓶ぶら下げてふらりと来てね。『ああ、ご苦労さんだね』ってそのまま座り込んで二人で酒盛りしたもんだよ。あ、そっだ。係長、こんなんでも良かったら飲むかね」

並木はつと立つて、厨房から何やら琥珀色の液体の入った瓶を持ってきた。

「おい、ちよっと。そりゃ、なんだね」

「なに、料理用のブランデーだよ。味はよくないけど、アルコールに違いはないよ」

彼は山倉の意向も聞かずに、二つの茶碗にブランデーを注いで、その一つを無理やり押し付けて来た。当然また勤務時間中である。山倉ははつきりと断りもせず、茶碗を受け取った。

「係長もさ、年上の者の権限で課長の行き過ぎた所は、ばしつといってやんなきゃいけないよ。そうしないから、陰で『なまくらさん』なんていわれちゃうんだよ」

何でも率直にいう男である。そこまでいわれているのに、依然として山倉の顔から曖昧な笑いは消えなかった。彼は茶碗の中のブランデーを、さつきから飲むでもなく舐めるでもなく弄んでいた。こんな風に困った立場に追い込まれたときの癖で、彼は左の眉を不自然に吊り上げていた。

「まあ、つまらないはなしはやめにしましょうね」

並木は山倉の態度にむしろいたたまれなくなったのか、急に自分のほうから話題を変えようとして来た。

「ところで俺なんかがこういうのもなんだけど、会社のことだけどさ、あんまり思わしくないのかい」

山倉は思わず並木の顔を振り向いた。並木は前よりも心持ち山倉の方に身を乗り出して、右手にブランデーの茶碗を持ったまま、真剣なまなざしで尋ねていた。

「そんなこと、誰から聞いたのかい」

「誰からってことじゃないけどね、みんな噂してますよ。それこそ食堂のパートのおばさんたちまで、暇があるとその話でもちきりさ。どうにも業績が良くないんだってね。去年の決算だってまた赤字だったんでしょ」

並木はさらに身を乗り出し、一段と声を低くしていった。遠くに製品倉庫から出荷するためであるう、フォークリフトを運転する音が聞こえていた。

社員食堂には人影もなかった。

「いろいろと切り詰めを始めたらしいね。近いうちにこれがあるんじゃないかって噂もあるくらいだぜ。係長、本当のところを教えてくださいよ」

彼は手の甲を上にして右手を自分の喉仏のあたりに当て、「首切り」のしぐさをした。山倉は返答に窮した。そんなことは何ひとつ聞かされていなか

つたからである。

確かに二年ほど前から、急激に経営状態が悪くなっていることは周知の事実である。東洋電子工業は、オシロスコープなどをつくる計測機器の専用メーカーである。それが世の中の不況の影響を被り、家電メーカーの景気が悪くなるとともに、計測機器はぱったりと売れ行きが落ちてきた。売り上げは五年前の水準にまで落ち込んで、慢性的な赤字体質になっている。当然社内では経費の削減のため、様々な施策がうたれていた。中には山倉の仕事に直接関係のあることも多かった。曰く、コピー代を半減せよ。曰く、電気代節約のため昼休みは明かりを消せ。などなどである。今年の四月には新入社員の数も、前の年の半分以下であった。

それでも山倉は会社がそこまで追い詰められているとは思っていなかった。彼の長いサラリーマン生活の中では、二度に亘るオイルショックもあったし、円高不況もあった。その度に会社は、もうこれで倒産するようなことをいいながら、危機を乗り切ってきたではないか。社員に耐乏を強いながら、会社自身は成長してきたではないか。だから今度だってしばらくのあいだ首をすくめて我慢していれば、そのうち景気は良くなるのだ……そう信じて疑わなかった。けれども並木の口から出る真剣な言葉を聞いていると、今度は何かが違うのだろうかという気持ち次第にわいてくるのを、押さえ切れなかった。ついさきほどの江尻と池谷の会話が、やけに気になってくる。

「いや、ぼくも何も知らないんだよ」

「水臭いこといわないでくれよ。会社が危なくなれば、俺たち業者だっておおいに影響があるんだ。教えてくれよ」

「それほど話題になっているのか」

「ああ、パートのおばさんたちの間でも、もちきりになっているぜ。工場の女子社員だって心配し始めているよ」並木はちよつと息をついて、山倉を試すように眺めた。

「係長、ほんとにまだ知らないのかい」

「本当だよ」

「人事課じゃこつそり、首にする社員のリストを作り始めたって噂だぜ。それも知らないのかい」

「いや……初耳だね」

並木はまた口を尖らせてすねるようにしていたが、

「そうかい。それだけいふんなら本当に知らないんだろうね。だけど、もし

何か分かったら真つ先に裏で教えてくださいよ。後生だからね」

彼の大袈裟な言い方に、山倉は少しおかしくなって笑おうとしたが、彼を覗き込む並木の目を見て笑いが消えてしまった。いつになく不安そうに見つめる光の中に、強者にすぎる弱者のような媚びを感じたのである。会社と業者……確かに仕事を委託する立場と受ける立場はあるが、普段はほとんど意識することなくいたつもりなのに、ふとそんな力関係を感じてしまう一瞬だった。

山倉はこれ以上はそこにいつらくなり、そこそこに話を切り上げて食堂を後にした。

工場の敷地の西の端にある食堂棟から、総務課のある東の管理棟に戻りながら、山倉は今のことを頭の中で反芻していた。ついに我社もそこまで追い詰められたのだろうか。最近の新聞を賑わせている「人員整理」や「リストラ」という言葉が、頭をかすめて消えた。まさかそこまでやりはしまいという思いと、なぜ並木がそのような噂をつかんでいて、自分が何も知らなかったのだろうかという悔しさが、彼の中で複雑に交錯していた。

そういえば総務部長の宮原と、人事課長の上村がここの一月ばかり毎晩遅くまで残って会議室にこもり、打ち合わせを続けていた。新人社員の配属も終わり、人事の仕事は一段落しているはずなのに、何をしているのだろうかと疑問に思うことが何度かあった。今思えばあれは人員整理のやり方について念入りに計画を練っていたのかも知れない。しかし人事課の係長の長谷川は何もそれらしいことをいっていなかった。彼もまた、何も知らされていないのだろうか。山倉の思いはつきなかった。

だからきつと上の空であるいていたのだろう。「山倉係長」と呼ばれて氣付いた時には、すでに相手は何度も自分を手を呼んでいたようだった。振り返ると後ろから小走りに追い掛けてくる、保安員の森口が目に入った。

「ああ、森口さん、どうしたね」

保安の制服に身を包んだ森口は、かなり遠くから走ってきたのか、息を切らして山倉に追いつくと、帽子を脱いでハンカチで顔の汗をぬぐい微笑みかけた。

「係長、うちの息子なんですが、今週からようやく学校に行くようになりましたよ。どうもいるありがとうございました」

山倉は思い出した。森口の中学三年になる息子は、登校拒否でしばらくの間学校にいていなかったのである。小心ものの森口はそれが気になって、

仕事も手に付かないほどだった。山倉はその相談にのってやつたり、森口が何度か年休を取るときに配慮してやったのだった。といっても、彼の立場からすれば特に努力して難しいことをしたわけでもないのに、森口は心の底から礼を述べている。

「そうか、良かったねえ。これで森口さんも安心して働けるね」

山倉のかける言葉に森口は、再び芯から人の良さそうな微笑みを返して答えた。こんな風に現場で働く人達ひとりひとりの心のひだの中に、さまざまな思いがあることを江尻は知ろうとしない。

・・・もしも人員整理が始まったら、こんな人でもその対象になるのだろうか・・・

山倉は森口の無防備な笑顔を見て、ふと思った。まだ終業の時刻には間があり、六月も近い太陽は地平から高く、森口の額のしわや白髪の混ざりかけた短い頭髮の一本一本まで鮮明に浮かび上がらせ、拭き残した汗の玉を容赦なく照りつけていた。

嵐は何の前触れもなく突然やって来て、すべてのものをなぎたおした。少なくとも普通の者にとってはそう見えた。

良く見ていれば、しばらく前から高い梢をそよがせる風の声が変わってきたことや、空を流れる雲の表情がただならぬ様相をしていることに気付いたはずである。あるいは何万キロメートルもの高みから地上を見下ろす神のような者がいれば、渦を巻く低気圧が勢いを強めながら、近付いてくるのが分かったかもしれない。だが地をはい回る虫や獣たちにとっては、これまでの平穏な天候が急変する事など、考えられなかった。たとえ天気が悪くなっても、首をすくめて一時の雨や風さえしのいでいれば、日々の暮らしまで乱されることなどないと信じて、心やすらかに自分たちの生活を営んでいられたのだ。そしてこの件に関しては、程度の違いこそあれ山倉の立場も同じだったのである。

社員がそれを知ったのは、七月の一日に行われた社長の朝礼によってだった。山倉はその日も早く出社して、放送設備をチェックしていた。社長朝礼は社長室にマイクを設け、本社全体に放送を流して行われる。彼がマイクの調整をしていると、普段はこんな所にまでやって来ない江尻が、ふらりと社長室に顔を出した。

「山倉さん、準備は大丈夫だろうね」

「はい、いつもと同じです」

江尻は室内を一瞥して、自分でマイクの高さまでいじってから、「今日は大事な話をされるから、絶対に間違いがないように」と言い残して部屋を出ていった。

途端に山倉は胸騒ぎがしたものだ。すると今日こそ重大発表がされるのか。社員の間の単なる噂話が、現実のものに変わるときがきたのか。その予感に当たっていた。

社長朝礼はラジオ体操の後、八時三十分きっかりに始まった。簡単な時候の挨拶がすんで、恒例の先月の売り上げ報告もなしに、社長はいきなり本題にはいった。

「さて、本日は皆さんに、大変残念なお願いをしなければなりません」

その瞬間、一千人余りの社員たちは息を止めて、次の言葉に注目した。「役員を始めとして、全社一丸となつての努力にも拘らず、経営状態が依然として好転しないのは、これまでの朝礼でもお話してきたとおりです。社員の皆さんの多大な努力とご協力には、深く感謝いたします。

しかしながら、もはや会社が生き残るためには、普通の努力の範囲を越えてしまいました。ここに至つて、会社としては最後の方法をとることを決断いたしました」

なぜこんな勿体ぶつた言い方をするのだろうか、と考えながら山倉は聞いていた。経営者というものは皆こんな話し方をするのだろうか。ひたすら下手に出て、社員にお願いして動いてもらうという態度に出ながら、実は強圧的な指示を与えているにすぎない。最近の新人類はいざ知らず、年配の社員のなかにはこんな言い方をされるとほろりとするものもいるようだ、山倉はむしろ企業の冷酷で狡猾な面をそこに見ていた。

「その方法とは、まさにわたしにとつても、社員の皆さんにとつても骨肉を絶つ思いでお話ししなければなりません。すでに考えられる限りの合理化を行っている以上、残されているのは人の合理化であります。すなわち先日の役員会で、それ相応の条件をお約束した上で、希望退職を募ることを決定したのであります」

その後社長は、創立五十年の歴史の中でこのような汚点を初めてつけるのは残念だとか、辞めるものも辛いが残るものも辛いのだとか、明日の栄光のために今日の屈辱を忍ぼうとか、感傷的な文句を三十分近くも並べたが具体的な募集人数や期間などにはなにひとつ触れずに朝礼を終わつた。

しかし社長朝礼が終わるや、すぐに引き続いて各職場で部長や課長による朝礼が行われて、その具体的なやり方が細かく説明されたところを見ると、すべては管理職の間に事前に説明と根回しが行われていて、発表の方法まで綿密に打ち合わせられていたに違いなかった。山倉は自分が総務部にいながら、いままで何も嗅ぎ付けられなかったことが残念で仕方なかった。まるで妻の不貞に気づかないひとの好い男の目の前に、いきなり妻の愛人が現れてうろたえているような思いがした。

そして当の総務部では総務部長の宮原が希望退職の内容について自ら説明を行った。それによると募集人数は本社社員のおよそ二割に当たる二百人、退職金は支給率を割り増したうえ勤続年数に応じて最高で十二ヶ月分の給与が上積みされる、募集期間は今日から三ヶ月、というのである。宮原はまた自分なりの言葉で会社の窮状を訴え、

「希望退職の事務処理に当たっては、人事課を中心として総務部全体で当たらねばならないが、総務部だけが希望退職の対象にならないということではありません。まず隗より始めよ、なのです」と結んだ。

長い朝礼がようやく終わり、山倉がこわばった腰をさすりながら自分の席に座ろうとすると、前の席の安藤利佳子が、総務課のもうひとりの係長である井手に「あのう、係長」と申し訳なさそうに尋ねているところだった。井手はまだ三十になっただけで、優しい性格とそこそのルックスから、女子社員の間では人気がある。「『カイヨリハジメヨ』ってなんですか」

「ああ、あれは確か中国の戦国時代の話でね、言い出した本人から始めなさいというふうな意味だったと思うよ」

「ふうん、部長のお話っていつも難しいですね。学校で習わないことばかりだから」今年短大を出たばかりの利佳子は本当に難しそうな顔をしていた。

宮原は話のなかにやたらむずかしい漢語や、中国の故事ことわざを好んでいれる癖があった。しかし山倉ぐらゐの年配のものならともかく、最近の若い社員には「キウジンノコウワイツキニカク」だとか、「カデンニクツライズ、リカニカムリヲダサズ」などといってみても、ほとんど外国語を聞くようで訳が分からないのが実情である。もつともそんな宮原でも、いつだったか新人社員用の訓話の原稿の中に、「鶏口となるも牛後となるなかれ」を「鶏頭となるも牛尾となるなかれ」と誤って書いているのにはまいってしまった。しかしよく考えてみると、この字面のほうがよっぽど意味が分かりやすいかもしれない。

それはともかく、この日の朝礼をもつてそれまで噂にすぎなかったことが、現実の問題となって社員の上ののしかかった。

……会社はそれほどひどい状態だったのか。

……本当に希望者が二百人も集まるのだろうか。

……この際早く見切りを付けたほうが得かも知れないぞ。さて、俺の退職金は……

様々な思いが交錯し、さざ波のように静かに社員の間に広がっていった。

やがて希望退職とは名ばかりで、実際は人事課の作ったリストを元にした肩叩きだという情報が速やかに浸透していき、だれもが自分の名が果たしてそのリストにのっているかどうかで、戦々恐々とし始めた。一週間もすると、自分が実際その肩叩きにあつたという者がちらほらと現れ、山倉の耳にも入るようになった。山倉はもちろん人事は担当していないが、総務部にいるといつことで、以前から年配の社員に時々相談を持ちかけられることがあつた。ある日の昼休み、彼が昼食を終えて食堂棟からぶらぶらと出てきたところへ、資材課の徳田信子と堀川静江が急に目の前に現れ、「山さん、ちょっと」と食堂棟の裏に山倉を連れ込んだ。「どうしたんだ。二人そろって」といぶかる山倉に徳田はやや顔を引きつらせながらいった。

「とうとう、来るものがきたよ」

「何のことだ」

「今朝あたしたちは別々に課長に呼び出された。そして『希望退職を募っているが、君はどう思うのか』ってきかれたんだ」

徳田の唇はかすかに震えていた。堀川にいたつては頬を紅潮させて興奮している様子が明らかに見て取れた。

「で、どう答えたんだ」

「別に考えていませんっていった。そしたら『念のため考えてみたらどうだ。一週間後にもう一度希望を聞こう』って。で、あたしは考えは変わらないと思いますっていった。そしたら次に課長は『でも会社にこのまま残っても、君の仕事はなくなると思うよ』というのさ。静江さんにも同じことをいったそうよ」

「あの課長のことだもの。あたしたちが応募しますっていうまで、何度でもしつこく呼び出すつもりに違いないんだ」

この二人は製品の梱包担当として、ラベルを貼ったり、出荷区分別に区分けをする仕事をしている。どちらも勤続三十年以上のベテランで、徳田には

孫もいる。会社としては最も合理化の対象にして切り捨てやすい部分にある。彼女らが狙われたのもうなずける気がした。

「そうかい、そりゃ困ったな」

山倉としてもそれ以上いいようがなかった。慰めることも、アドバイスすることもできないのだ。

そんな光景が工場のあちこちで見られるようになった。狙われたものには幾つかのバターンがあった。ひとつは既婚の女子社員であり、次は中高年者だった。そのつぎにはいわゆる人事考課の成績不良のものが対象になっているようだった。要するに会社にとって、プラスにならないと考えられる社員である。それらの条件が重なっているものほど早く声をかけられた。条件がひとつでもあてはまるものは、明日は我が身かとおびえて暮らさねばならなかった。だが例の朝礼から半月経つというのに、まだ総務部の中で肩を叩かれたというものはいないようだった。

(承 前)

ある日の午後、山倉はいつもの習慣通りトイレに入っていた。彼は珍しく便秘気味で苦しんでいたが、その最中にだれかが入ってきて小用をたし始めた。山倉は神経質なたちで、人がすぐ近くにいたのが分かれると、「大」のほうが出なくなってしまうので、そのときも息を詰めて出ていくのを待とうとしたが、じぎにもう一人が入ってきて並んで小用をたし始めた。

入ってきたときの「あ、どうも」という声からすると、後からきたほうは人事課長の上村のようである。先にいるほうはそれに答えもせず、びちゃびちゃと下品な音を立てて放尿していたが、やがてその首も終り洗面台のほうへ動いて、手を洗う水を出しながら初めて声を出した。

「うちの部の例の候補者だけだね」

山倉ははつと息を飲んだ。それは間違はなく部長の宮原だった。

「はい」と上村はかしこまって返事をしている。

「そろそろいい加減に決めなきゃならない。明日朝一番で決めてしまいたいんだが、君は都合はいいか」

「はい、大丈夫です」

「そうか、じゃあ江尻君にもいって、それからどこか場所を押さえておいてくれ。人に聞かれたくないから、第一応接室がいいな」

「分かりました。手配しておきます」

会話はそれだけで終ってしまったが、山倉は便座に腰かけたまま息をひそ

めてすべてを聞いていた。「例の候補者」というのが何を意味するかは、あまりにも明白だった。恐ろしい話を聞いたものだと思った。宮原も上村もトイレの中ということで、つい安心していただろう。

明日の朝、部課長の密談によって総務部の中で首を切られる……いや、表向きには希望退職に応募するものが決められる。そして近いうちに本人に対して、上司から巧妙に希望退職の誘いがかけられる。中には拒否するものもあるだろう。だが本人の意志には関わらず、何度も何度も面接が繰り返され、最初は抵抗していたものもついには根負けして退職に同意する。

何日か経つと職場でそのことが発表され、うわべだけの盛大な送別会と共に一人の犠牲者が会社を去っていく。

それが自分でないと言い切れるのだろうか。

突然心臓を締め付けるような考えが、山倉の中に噴き出した。そうなのだ。彼ほど例のブラック・リストに載る条件を備えたものも少ないではないか。

まず彼は高齢者だった。徳田や堀川とほぼ同世代で、五十代に足をつ込んだところである。それに、なによりも人事考課の良いわけがなかった。

江尻の彼に対する評価がどんなものかはおよそ察しが付いている。江尻は初め年上の部下である山倉に対して、自分が課長であることを必要以上に誇示して、上下関係を固めようとしているように見えた。だがやがて山倉がそれほどの強敵ではないことを見て取ると、今度は山倉の不得意な分野を徹底的に攻め立てて、彼をいたぶる方針に切り替えたようである。「総合福祉ビジョン」はその武器のひとつだった。江尻はしきりに「総務行政」ということを口にした。これからの総務は単なる社員の御用聞きであってはならない。総務行政のビジョンのもとに、社員の働きやすい職場環境作りを戦略的に進めていかなければならない……。それは確かにその通りだった。山倉は江尻にいわれるまで、そのような面から自分の仕事を考えてみたことがなかった。

彼はおよそ三十年にわたって現場から叩き上げてきた男であり、現場の苦労は痛いほどに分かっていたが、仕事を論理的に組み上げてみることは苦手だった。江尻はそこを突いて山倉の長年の経験に則した仕事のやり方を、無計画とか戦略的でないとか非難してきたのである。

その一方で江尻は現場の面倒な仕事を山倉に全部押し付けていた。総務課の業務は半分は現場といつていい。食堂の運営や保安の業務や、役員車の運転手や医務室の管理もそうである。それらの職場に働く社員や業者の数はか

なりにのぼる。しかもホワイト・カラーと違って職人気質で扱いが難しい人も多い。その人達に会社の方針を伝え、まとめ上げて行くのは相当厄介な仕事である。

江尻にいわせれば「課長の仕事は戦略をたてることで、現場の細かい調整は係長の仕事」と割り切るに決まっていた。しかしその「細かい調整」にどれほど労力を要するものか、江尻が知っているとは思えなかった。たとえば保安の森口が息子の件で悩んでいたことなど、江尻は気にもかけないだろう。丸一食品が江尻のむずかしい注文を生かして、食堂のメニュー作りにいかに心を砕いているかなど考えもしないだろう。そしてそのために山倉が裏でどれだけ走り回っているかということも。

そのギャップが人事課となつて現れているのだろう、と山倉は思った。江尻から見れば山倉は総務の本来持つべき戦略を理解できない、古いタイプの総務マンにしか過ぎない。これからの時代には必要でなくなる人間であり、陰にまわれれば「なまくら」と吹聴されているのを知っていた。だとすれば、江尻が例のリストに山倉の名を載せようと強力に推すことは、目に見えていてではないか。

山倉は定年まで残された十年足らずの歳月を思った。ついこの間まではその日々をどう無難に過ごすかが人生の大事だった。これ以上の出世もないが、生活の不安に襲われることもない春の光に包まれたような穏やかな暮らし。そこには大きな希望はないが、絶望もなく平穏な日々があった。それが大部分のサラリーマンの五十代なのかも知れなかった。今その日々が大きく崩れ去ろうとしていた。

ここで東洋電子を辞めても、わずかばかりの退職金では余生を優雅に暮らすことなど望むべくもなかったし、新しい職場を探すことなどさらに考えられない。かれの年では再就職の場も限られているし、職を探しに職安を回る自分の姿を思うと、そのエネルギーも湧いてこなかった。平穏の日々が絶望の淵に落ち込んでいくのが感じられた。

だが江尻はともかく会社は本当に自分を評価しないのだろうか。とうに覇気を失ったと思えた心の底から、プライドがむくむくと頭をもたげてきた。これまでおよそ三十年間に亘って、会社の円滑な運営を裏で支えてきたのは自分だというプライドが。むずかしい総務業務を第一線で支えたのは、歴代の課長だけではないのだ。この会社創設以来の危機に当たって、自分の貢献はどの様に評価されるのだろうか。そう考えると明日の会議の内容を何とし

でも知りたいという気持ちが強くなってくるのを感じた。

知りたい。どうしても知りたい。江尻だけでなく総務部の管理職たちが、山倉という人間をどう評価しているのか。会社にとって必要か必要でないのか、どう考えているのか、生の声を聞いてみたいのだ。そのためには明日の会議を何等かの方法で直接聞いてみなければならぬ。それは尋常な方法では出来ない相談だった。

その欲求は次第にたえがたいほど強く高まってきた。山倉はまだ便座に腰を掛け、下半身をむき出しにしたまま、その思いに囚われて時の経つのを忘れていた。尻はすっかり冷たくなっていたが、頭は血が上って熱くなったままであった。これほどの激しい感情がまだ自分のうちに残っていたことを、彼自身まだ信じられずにいた。

それからの半日というもの、山倉は便所の中で思いついた恐ろしい考えを實現するためのアイデアに心を砕いていた。

自分の席に戻ってすぐに総務課のカウンターにある会議室と応接室の予約表に目を走らせ、明日の午前八時三十分から十時まで上村の名で第一応接室を押さえてあることを確かめてから、彼の心中はますます穏やかではなくなった。幾つかのアイデアが浮かんで消えたが、夕方には彼の心はひとつに固まっていた。

その日山倉は並木を赤ちようちに誘った。会社から駅まで行く途中の焼き鳥屋が、彼の行きつけの場所であった。生ビールを勧めながらあまり並木ができ上がらないうちに、計画を説明して協力を依頼すると並木はさすがに驚きの声を上げた。

「へええ、あきれたよ。なまくらさんがそんな大胆なことを考えるとはねえ」だが砂肝の串をほおばりながら、口のはしでにや々と笑って「まあ、好きにやってくれたらいいよ。俺は知らないよ」

山倉はまだ飲み足りなさそうにしている並木を促して二時間ほどでそこを切り上げ、二人分の勘定を払って家路についた。

次の朝七時過ぎには山倉は出社していた。保安の森口がいち早く彼の姿を見付けて「おはようございます」と大きな声であいさつした。山倉は設備の点検などでたまに朝早く出社することがあったので、誰からも不審には思われない。彼はまだ総務部のフロアに誰もきていないことを確かめると、ドライバーと小型のラジオペンチを持って第一応接室に入った。

彼がこれから細工をしようとしているのは電話器だった。はじめ彼は小型の盗聴器を応接に仕掛けようかと考えたが、そんな適当な盗聴器などなかったし、万一発見されたときのことを考えると証拠が残るものを使いたくはなかった。それに盗聴器を仕掛ければ明らかに犯罪だという変なこだわりがあった。

代わりに目を付けたのが電話器である。電話器といっても応接室にあるのは、構内内線専用のインターホンであるが、最近のものは非常に感度がよくなって、二三メートル先の会話なら十分キャッチする。第一応接室はせいぜい四畳半程の広さしかないので、電話器の送話口をマイク替わりに使えば十分に会話を聞くことができるはずである。ただしこの方法には幾つかの問題点があった。ひとつはどうやって電話器を通話状態に保っておくかである。受話器を外したままにしておけばいいのだが、そんなことをすれば誰の目にも電話がつながっていることが明白ではないか。そこで要は受話器を置いたままの状態にして、いかに通話を保つかにあった。

山倉は電話器のフックの配線をいじって、受話器を置いた状態、つまりフックに受話器を乗せた状態でも通話が切れないようにしようとしていた。電話器の裏蓋を慎重に開けると、すぐに裸の配線が見えた。フックの所のスイッチに短い銅線をはさんでショートさせる……。作業は驚くほど簡単にすんだ。

次に山倉は細工をすませた電話器を元の場所に戻し、受話器を取ってある内線番号をまわした。呼びだし音が正常に鳴っている。五回、六回、七回目によつやく先方が出た。

「はい」

相変わらず無愛想な並木の声だ。

「頼むよ」

山倉はそれだけいって、受話器を置いた。ひと呼吸してもう一度受話器を取る。受話器の向こうの雑音がかすかに聞こえてくる。何か物と物がぶつかりあう音、大声であいさつしあう人の声……。などだ。回線はちゃんとつながっている。彼は安心して受話器を元に戻した。

もうひとつの問題がこれだった。通話状態にしたとしてそれをどこで聞か、言い換えれば応接室の電話をどこにつながった状態にしておくかである。自分の席で聞くことなどはもちろん出来ない。一時間以上の間人目に触れぬ、だれからも邪魔されぬ場所でないならならぬ。山倉はその場所として食堂

の事務室を選んだ。事務棟からはだいぶ離れているが、並木さえ協力してくればこれほど安全なところはない。山倉が打ち合わせと称して食堂に一時以上こもっていても、恐らく怪しむものはいないはずだ。食堂は夜勤明けの社員のために朝食も作っている。さいわい今日の朝の当番は並木に当たっていた。この後は十時近くまで、ほかの食堂の社員は出勤してこないはずである。

山倉が誰にも見付からず作業を終えて、ほっと一息ついて応接室を出たところ、思いがけず安藤利佳子にばったり鉢合わせた。

「おはようございまあす」

利佳子は大きな瞳を輝かせて、雀のように元気なあいさつをかけてきた。いつものように明るい大きな声だ。彼女は会社が今どんな状態なのかなど、眼中にないのだろう。

「係長は今日は早いですね」

「ああ、ちよつとね。安藤さんもういぶん早いね」

「わたし掃除当番なんです。本当は朝つらいんです」そういいながら彼女は湯沸室のほうに走っていった。山倉はほっと息をついて、手の中のドライバーの感触を確かめた。

これがその朝唯一のひやりとする出来事だった。その後山倉は何食わぬ顔で席に着いて、新聞を読んだり書類を揃えたりしながら八時半を迎えた。いつもと同じ様にラジオ体操が始まり、朝礼が終わった。江尻はすぐにノートだけ持って席を立つとした。

「おや、課長どちらへ」何も知らぬ井手が尋ねた。

「うん、第一応接で部長と打ち合わせがある。」江尻は面倒くさそうに答えた。「ちよつとこみいった話だから、電話は回さないでくれ」

山倉は心の中で快哉を叫んだ。もうひとつの問題点はこれだった。もしも会議中に第一応接室に電話するものがあれば、いうまでもなく話中でつながらない。一度や二度ならまだしも、ずっと話しながら不審に思い出すだろう。始めから電話をまわすなどいってくれれば、その心配はなくなる。あとは反対に応接室から電話をかける場合だけが、今度の場合はまずその可能性はないだろう。

江尻につられるようにして宮原と上村も席を立つのを見ると、山倉もそそくさと席を離れることにした。行く先はわざと告げなかった。

いよいよ始まるのだ。彼ははやる心を押さえて、食堂まで小走りに急いだ。

ほんの二三分が長く感じられた。事務室に駆け込むと並木はハイライトをくわえて日誌をつけているところだった。側の机の上に受話器が無造作に置かれていた。山倉の姿を見ると、並木はちらりと一瞥をくれたが、そのまま知らぬげに日誌を書き続けた。

「しかし巨人は駄目だね」いきなり受話器の向こうから、宮原のそんな声が聞こえたので山倉は面食らった。

「投手陣がぼろぼろですからね。今年も優勝は無理でしょう」これは上村だった。

「わたしはもともと広島ですからね。関係ないですよ」これは江尻の声である。

せつかく一言も聞き逃すまいと山倉が息急ぎ切ってきたのに、三人はたっぷり五分ほど野球とゴルフの話に終始していた。お陰で彼は聞きたくもない宮原のゴルフの自慢話を散々聞かされることになった。だがふいに宮原の声の調子が変わった。

「さて、やるかね」

その瞬間電話の向こうでも空気が張り詰める様子が伝わってきた。二人の課長は居住まいを正して宮原の次の言葉を待った。そして山倉も口から飛び出すかと思うほどの心臓の高なりを感じながら、同じように宮原の言葉を待った。

「まず総務課のほうからだが、保安の検討は進んだのかな」

「はい、パシフィック警備との話も順調に進んでいますから、今年度中には業務の移管ができると思います。あわせて今の保安係の四人の移籍も大丈夫です」

「うん、保安や食堂なんかの業務は基本的には業者に委託していくべきなんだ。これで内部人員も減らせるしね。本人たちにはいつ話すんだ」

「はい、今月中にはやるうと思ってます」

「そうか、これでまず四人だな」

山倉はあつと息を飲んだ。今の話は保安係の四人をパシフィック警備に移籍させて、しかもその時点で保安の仕事を業務委託しようというのである。パシフィック警備は東洋電子のメインバンク系列の警備会社である。移籍とはいえ本人の希望を無視した会社の都合による首切りには違いなかった。しかもそんな計画のあることすら山倉には一切知らされていなかった。森口の人良さそうな顔が脳裏に浮かんで消えた。

こういつやり方もあつたのか。山倉はあらためて企業の非情な面を見る思いがした。説得に当たっては「あなたの将来を考えた上で」とか、「こうする方が結局お互いのためになるから」といった文句がつかわれるのだらう。森口が自分のところに相談にきたら何といえいいのだらうか。彼には答えが出せないだらう。

「さてと、次は人事課なんだが」

「やはり高山さんに辞めてもらうしかないでしょう」上村が宮原の言葉を先取りするようにいった。

「そうだな。彼女を置いておくことはまずいだらう。旦那には僕の方からいっておくよ」

高山昭子は人事課のベテラン社員である。社会保険について彼女の右に出るものはないほど、業務には精通していた。しかし彼女の夫は技術部の係長をしている。既婚社員、しかも共稼ぎから切り捨てようという方針からすれば、それにびたりと当てはまる者を総務部に置いておくわけには行かないのだ。このくらいは山倉にも予想が付いた。

「これで五人だ。総務部二十七人の在籍からすると、出来たら後一人は減らしたいところだ。これについて二人の意見を聞く」

先ほどから山倉の拳は冷汗でびっしょりと濡れていた。電話器をしつかり押さえようとしても汗で滑りそうで、彼は受話器にハンカチを巻いて押さえていた。

「わたしは山倉を推薦したいと思います」

いきなり自分の名が江尻の口から出てきたので、彼の発汗は余計ひどくなった。

「山倉さんか。理由を聞こうか」宮原は落ち着いていった。

「要するにこれからの総務行政について行けないんですね。現場と適当にやっているつもりであつたが、江尻のこの言葉には怒りがつのってきた。頭で予想するのと実際に生の声で聞かされるのは違っていた。何より江尻が、山倉山倉と呼び捨てにするのは許せなかつた。いくら部下でも年上のものに向かつてその態度はなんだと、となりつけてやりたかつた。もっとも実際にはそ

んなことは出来はしないのだが。

「ふむ、上村君はどう思う」宮原は上村に水を向けた。

「そうですね。でも『なまくら』さんだって使いようで役に立つと思いますけどね」

「いやいや、それはそうかもしれないが、ああいう人がいると若い者に悪影響を与えるよ。この際はつきりしておいたほうがいいね」

どうやら自分の運命は決まりつつある……山倉は思った。これ以上電話を聞く気にはなれない。もう受話器を投げ出そう、そう考えたとき、宮原が口を開いた。

「江尻君、君の見方はまだ偏っているな」

「は……」江尻は何を言われているか分からないようだった。

「君は山倉さんがいるおかげで、いかに現場がスムーズに運営されているか、考えていないようだね。総務課は半分は現場なんだ。現場の人達とどうやって仲良くし、気持ち良く仕事をやってもらうかが大事なんだよ。山倉さんはそのために日頃から一見無駄に思えるような努力までして、その人達と人間関係を築いている。きみは保安の人や食堂の人達と、とことん膝を付き合わせて話したことがあるのかね。ビジョンも大切には違いないが、そういう泥臭い仕事も欠くことができないんだ。そういうことをやらしておくには、山倉さんはうつつつけの人間なんだよ」

江尻は一言も反論できなかった。

これほどに江尻が部長からやり込められる所は初めてだった。総務部の優等生の江尻が、である。それ以上に山倉にとっては、宮原が自分をこのように評価していることが意外だった。心の中で思わず部長ありがとうございませ、と手を合わせそうになった。

「しかし」と宮原は続けた。

「それが彼の持ち味であると同時に限界でもある。この先会社にいれば自分のポジションを守ってそこその仕事はしてくれるだろうが、大きな貢献や画期的な仕事をしてくれる望みはない。まあ、彼はたとえてみれば」宮原はいったん言葉を切った。

「ケイロクのようなものだね」

ほんのわずかの間があったが、すぐそれに同調する上村の声があった。

「なるほど、ケイロクとはよくいったもんですね。いつもながら部長の語彙の豊かさには恐れ入りますね」

「そうですね。これから彼のことはケイロクと呼ぶことにしましょう」江尻もころりと態度を変えて、宮原に擦り寄っていた。

その後も会議は十分ほどつづき、二三人の名が話題に上ったが、結局それ以上の候補者は決まらないで終わった。だが山倉にとってはそれ以後の話は耳に入らなかった。

……「ケイロク」って一体なんだろう。

宮原を始め三人とも口を揃えて、山倉を表すには「ケイロク」という言葉が最もふさわしいと考えたのだ。何か特別な意味のある言葉にちがいない。だが彼には意味どころか、どんな字を書くのかすら見当がつかなかった。ケイロク、ケイロクと口の中で唱えているうち会議が終わってしまったので、山倉はあわてて電話を切り、並木に礼をいってそそくさと自分の席に戻っていった。

江尻はすでに席に座ってどこかへ電話をかけていた。その顔を見ると先ほどの憎らしい口調が思い出されて再び怒りが湧き起こってきたが、何食わぬ顔をして席に座り、たまっている書類を見ることにした。そうこうしているところ江尻の電話が終り、彼はつと席を立つてどこかへいってしまふ。その間に山倉は机の引き出しから、愛用の国語辞典を取り出した。辞典といっても主に書類を書く上で漢字が分からなくなつたときに使う、コンパクトサイズの机上辞典である。彼は指を滑らせて「け」の項を探していた。

………毛色………経路………敬老………稀有

載っていない。この辞書では駄目だ。

山倉は顔を上げて、前の席の井手をみた。井手は何かの、たぶん社内報の原稿を書いているところである。

「井手君、井手君」と遠慮がちに声をかけると、井手は嫌そうな様子もなく、

「はい、なんですか」と明るい返事を返した。

「ケイロクってなんだか知ってるかい」

「ケイロク……ああ、それはね、鶏の肋骨のことですよ」彼はそういつて

メモ用紙にボールペンで、「鶏肋」と書いて見せた。

「どつという意味なんだ」

「意味ですか。ちよつと忘れちゃつたな。たしか三国志の中に出てきたのを覚えています。曹操がね、どこかの城を攻めていたんですよ。そこで部下が彼に城攻めの策を聞きにくるんです。ところが曹操は食事中でね、鶏のあばらをしゃぶつていたんです。それで部下に対して思わす『うむ、鶏肋だ』と

いつてしまっんですね。それを部下は何かの指示だと勘違いして失敗するといった話だと思っんですが、詳しいことは忘れちゃったな」

彼はあたり構わず大きな声で説明するので、山倉は閉口した。ほんの十メートル程先には宮原の席がある。部長はいま女子社員になにかの指示を与えている最中で、こちらの会話など耳に入っていないらしい。

「でも、なんでそんなこと聞くんですか」

「いや、別になんでもないんだ。もういいよ」山倉はあわてて手を振って彼を制した。

・・・やはりもっと大きな辞書でひかなければ駄目だ。社内でどこか広辞苑を置いていなかったかな。そう考えているとき、誰かがあわただしく事務所の中に駆け込んできた。それは製造課の係長の赤井だった。

「山倉さん、大変だ。工場で労災が起こった。すぐに来てくれ」

「なに、場所はどこだ。事故の状況は」

人命に関わるようなことになっては一大事である。山倉の長年つちかわれた本能に近い反射神経が働いた。彼は手帳とボールペンだけをつかんで、赤井について一目散に工場棟へ走り出した。鶏肋のことは、しばらくお預けになった。

希望退職者は二ヶ月では当初の予定人員に達した、という社長の発表があった。会社の窮状に理解を示してくれた社員の皆さんに深く感謝する、ついでにはこの際思い切って身を引くことを決意した、二百人の仲間たちを温かく送るために盛大な送別会を催したい、と社長は朝礼で声を詰まらせながら語った。年配の社員の中には、聞きながら思わず目頭を押さえるものも少なくなかった。

山倉の仲間たちも多くが会社を去ることに決まった。徳田と堀川もついに抵抗しきれず、退職願を書くことになった。森口をはじめとする保安係の四人もそうである。移籍の話が決まった日、山倉は森口をいつもの焼き鳥屋に誘った。

「森口さん、すまないなあ。やむを得ないことだったんだよ」そう詫びる山倉に、森口は意外にさばさばした表情で答えた。

「いいんですよ、係長。わたしなんか会社に残っていても、どうせ保安員しかできないんだから、かえって専門の警備会社に移って、一から保安の仕事で勉強させてもらったほうがいいんですよ。いまさらほかの仕事に就きたいと

も思いませんしね」

はじめ森口は無理にそう思い込もうとしているのかと考えたが、ここからそう思っていることが分かって山倉は哑然とした。こんな人の好い男でも回りにさからわず流れに身を任せて余計な自己主張などしなければ、そこそこの人生を送れるのかもしれない。

総務部からはあとふたりが退職することになった。ひとりとは予定通り高山昭子であるが、もうひとり意外な人物がいた。井手である。

彼が退職することを、山倉はほんの二三日前に聞かされた。その日八時過ぎ、残業を終えて山倉が帰ろうとすると、井手が「山倉さん、ちよつと」と彼をそばの会議室に連れ込んだ。

「実はぼく辞めることにしたんです」井手の口から出てきた言葉を、最初は信じられなかった。

「辞めるって、希望退職でかね」

「そうです」

「しかし、何でもた君が」

いぶかる山倉に井手は、希望退職を募集することを知ってから、直に決意したことだと告げた。ただ、いつのタイミングで申し出るかが決まらなかった。二週間程前によくやく江尻課長に話をした。それから毎日のように課長と部長から翻意するように説得されたが、彼の意志が固いことが分かって、やっと今日退職が認められたのだといった。最後に井手は、自分の抜けた後山倉さんにいろいろご迷惑をかけることになるのが、申し訳ないと思っている、と頭を下げた。

井手のようなケースは他にも何人かあった。希望退職に応募したのは、会社側の用意したリストに載っている「都合のいい」人物だけではない。有望な若手社員がこれを機会に、会社に見切りを付けて辞めていくケースもかなりみられた。ある技術部の課では課長に対する反発もあって、若手のエンジニアが五人もまとめて退職願を出し、收拾に大騒ぎとなった。優秀な社員ほど辞めていくというのは、半分は真実だったかもしれない。

そんな嵐が吹き荒れた後でも、山倉はまだ会社に残っていた。一時は完全に江尻に引導を渡されるかと思っていた彼が、である。そればかりか最近江尻の自分に対する態度はあきらかに変わってきていた。もう人前で厳しく問い詰めることはしなかったし、ときには優しい言葉をかけたり、「やつぱりこれは、山倉さんにやってもらわないと駄目だね」などと、彼を持ち上げる

こととするようになった。あの日宮原部長にたしなめられたことが原因なのだろうか。山倉には分からなかった。

社長の約束した会社主催の送別会が、月末も近い週の金曜日、盛大に行われた。といってもホテルなどを借りて開いたわけではない。会社の食堂を会場にして、料理はすべて並木チーフの指示により用意された、安上がりな会であった。そして宮原部長の発案で送別会というのはやめて、退職者への「激励会」という名目に変えられていた。この会の準備から実施の一切を任されたのは山倉であった。

ざっと百人くらいかな……山倉は食堂ホールを見回して見積もった。希望退職者たちのなかには、いろいろな思いが交錯していようから、招待されたからといっても全員が喜んで出席するわけはなかった。約半分の出席率は、相当いい方ではないのだろうか。会社側は管理職が全員出席しており、そのほかに職場の代表や組合の役員なども顔を揃えていたから、全部で二百人近い人数になっていた。彼は先ほどからその人込みの中に井手の姿を探していたが、どうしても見つけることができずにいた。

激励会は社長のあいさつに始まって、退職者代表のあいさつや社員代表のあいさつなどが次々に続いた。会が無事にスタートしてしまえば、もう山倉のすることはあまりない。

ホールの中はテーブルごとに幾つもの固まりができて、それぞれに会話ははずんでいた。その固まりの間をビール瓶を持って行き交う人達、酌をする人される人、山倉はそのいずれにも加わらずホールの後ろのほうにひとり自分の場所を得ていた。

彼はこの三か月のことを思い返していた。珍しいほどの冷たい夏だった。あつという間の夏だった。今はもう秋の気配のする九月の末である。夏のきらめきはほんの少しでしかなかった。山倉の古くからの友人や、若い頃世話になった先輩の多くが会社を去ることになった。そうして今、自分はここにいる。季節はこれから秋に、そして冬に向かう。

ぼんやりとグラスをささげて立っていると、側へ寄ってきてビールを注ぐうとするものがあつた。ふと見るとそれは江尻である。

「山倉さん、今回はご苦労さんだったね」

「いいえ、まあ、そんな」彼は課長の酌を受けながら、また曖昧な返事をした。

「そうだ、並木チーフにもいろいろ注文をつけて、食堂の皆さんにも無理をいったからね。あとで良くお礼をいって置かなけりゃな」

山倉は自分の耳を疑った。江尻がいつてしまつと、彼は手近な所にあつた皿に、ローストビーフやポテトフライなどを適当に乗せて、食堂の事務室に持って行つた。案の定並木は自分でビールを持ち込み、だいぶ前から手酌で飲んでいたのか、すでに真つ赤な顔をしていた。

「ほら、つまみを持ってきたよ」

事務室はホールとはドア一枚で仕切られているだけなので、ホールのざわめきを完全にさえぎることはできない。今も誰かのあいさつが終わつたところか、大きな拍手が聞こえていた。

「係長さ、俺最近考えたんだけどね」並木は珍しく鹿爪らしい顔をしていった。

「世の中にはね、白い犬と黒い犬がいるとするよ。どちらもそれぞれ個性があつてかわいいんだ。ところが世の中では白い犬のほうが可愛いと決めたとする」

彼は山倉がきいているかどうかはおかまいなしに、勝手につぶやいている。「そうすると黒い犬はだれも相手にしなくなるんだ。会社の中だつて、それと同じじゃないか。なんで白い犬だけがかわいがられるんだ。黒い犬だつてもしかすると茶色の犬だつて斑だつてかわいいかもしれない。どうして黒い犬や茶色の犬がいらないなんて、決めつけるんだ」

山倉はそれには答えず、皿に盛られた鶏の空揚げを見つめていた。

彼はまだ「鶏肋」の意味を調べていなかったのである。

あれから山倉はまず家に帰つて、娘の国語辞典を借りて調べようとした。だが娘は小学六年の時に買った辞書をいまだに使っていて、それには鶏肋という単語も載っていないかつた。

「なんだ、大学生になつて、こんな辞書しか持つていないのか」彼は小言をいったが、

「だつてそれで用がすむんだもん」英文科にかよう娘は事もなげにいった。

……だから若い者の日本語がおかしくなるんだ。

山倉は変なところに腹を立てたが、仕方がないので次に最寄りの本屋にいつて調べてみようと考えた。

本屋に行くといつても山倉の家は郊外の新興住宅地にあるので、最寄りの駅前というのもまだ整備されておらず、本屋などはない。そこで会社の最寄

り駅の本屋にいつてみようと考えた。こちらには商店街に二三軒の本屋があるのだが、みな夜七時頃にはしまつてしまつ。あいにく山倉はしばらく忙しい日が続いて、毎日夜八時九時まで残業することが続いていた。お陰でしばらくの間本屋で調べることもできない状態だった。かといつて休日にならざ図書館まで行つたり、町の大きな本屋まででかける気も起こらず、いたずらに日が過ぎてしまつた。

そうこつしているうちに持ち前の怠け癖が頭をもたげてきて、なにも意味をしらなくなつていいじゃないか、と思うようになってしまつた。それに知つたところでもし悪い意味だったり、自分の氣に入らない意味だった時のことを考えると、このまま知らないほうがいいんだとも思え、「鶏肋」は頭の引き出しのどこかにしまわれたまま、日々の生活の中では忘れられてきた。しかし今希望退職者の激励会が目の前で開かれているのを見、鶏の空揚げを前にしてまたあの言葉が思い起こされてきたのだ。

……あの日の鶏肋から始まつた。

山倉はそうつぶやいてひそかに苦笑した。いまでは江尻は彼のことを裏では「鶏肋さん」と呼んでいるのだろうか。なんと呼ばれようと自分は生き残つたのだ。人員整理の波をくぐり抜けて、会社に残れたのだ。そんな意味なんかどうでもいいじゃないか。

その一方、知りたいものを無理におさえつけるのはよくない、という心の中の声も聞こえていた。ほんの少し手間をかければいいのだ。たとえば明日の土曜日、散歩がてら電車で二十分ばかり乗つて、ターミナル駅まで出かけていき、どこか大きな書店にふらりと入つて広辞苑をひいてみればいいのだ。それで疑問は一気に解決するだろう。

その簡単なことが山倉には、なかなかできなかった。彼はグラスを持ったまま、無意識のうちに次第に左の肩を吊り上げていき、その姿勢のままなかなか動こうとしなかった。

……鶏肋つて一体何のことだろう。

そのときホールの中で、また大きな拍手が沸き起こつた。

次回予告

「ダブルクリック」本松 亮一

夫の死によって思いがけなく食品会社の社長に納まった主人公は、会社の人間関係やなれない仕事に苦しみながら、あるパソコンゲームにのめり込んでいく。ところが、そのゲームは・・・

株式会社 L・A・B



〒 556-0016

大阪市浪速区元町 1-11-8三協ビル 6F

PHONE 06-6636-6526

e-mail lab@lab.ne.jp

株式会社 L・A・Bでは、現在、このようにweb上で小説を配信しております。掲載ご希望の方は上記までご連絡下さい。

鶏肋 けいろく

著者 本松 亮一

配信日 1999年 9月 1日

* 無断転載をお断り致します。

* この物語はフィクションであり、実在の個人団体とは一切関係ありません。

* ご意見・ご感想をお待ちしております。

著者紹介

本松 亮一

生年不詳。出身地不明。20世紀後半の日本に生れた謎の作家。一説によると若い頃、諸葛孔明を慕って中国を放浪していたとも伝えられる。また、インドの山奥で密かに修行を続けていたとか。現在、東アジアを舞台にした大長編歴史小説を構想中とも言われている。